

信用創造と通貨供給

大阪経済大学 伊藤 武

最近、建部正義氏によって唱えられている内生的貨幣供給論の立場からする貨幣供給の基本的メカニズムとは、市中銀行はまず信用創造によって預金を設定し、その支払準備金を中央銀行に依存するというものであり、要するに通貨は銀行組織によって供給されるということにすぎない。しかし、この議論は市中銀行と中央銀行との関係を問題とするだけで、再生産過程のなかで決定される貨幣需要と供給の問題を解明したものではない。

提起されている問題は、自然発生的な貨幣供給のメカニズムが発達した銀行制度のもとでどのような姿をとるのか、を考察することによって解明される。

商品生産が行われている社会には、ある量の貨幣が存在するのであり、この貨幣量は現実には流過程で流通している貨幣量と蓄蔵貨幣として沈殿している貨幣量とに分かれ、蓄蔵貨幣は国内流通のための準備金および国際流通のための準備金としての役割をもっている。このことは、資本主義的生産のもとでは貨幣は資本および収入の貨幣形態という具体的な規定性を与えられるが、基本的には変わりはない。

銀行制度が発達すれば、蓄蔵貨幣は銀行に預金として集中され、銀行は蓄蔵貨幣の貯水池としての役割を持つ。蓄蔵貨幣の準備金としての機能は、銀行制度のもとでは、銀行預金の引き出し、銀行からの貸付という形態をとる。さらに、銀行は貨幣金に代わって流通する銀行券を発行し、銀行制度が高度に発展すれば、国内流通においては銀行券のみが流通し、中央銀行が銀行券発行を独占する。

この銀行券の専一的な流通のもとでも、再生産過程においては不断に蓄蔵貨幣が形成され、預金形成が行われるのであって、流通に必要な通貨は預金の引き出し、銀行からの貸付によって供給される。